



先月号に引き続いて専門的なグリーフ・カウンセラーとして、また正教徒としての信仰をベースとして死別した人々の悲しみに向き合っているサラ・バーン＝マテリの文章です。共同体にはいかに力があるか、いかに癒しがあるか、ということが語られています。

道央宣教セミ・ブロック機関紙

(札幌・小樽・苫小牧)

## 会 報

2024.8.1. No.410

札幌ハリストス正教会 発行

発行責任者 司祭 エフREM後藤悠太



小樽ハリストス正教会

〒062-0042 札幌市豊平区福住2条2丁目3番1号

TEL:011-852-5644 FAX:011-856-0818

郵便振替 02790-8-4469

<http://www.orthodox-jp.com/sapporo/>

E-mail haris-sp@bz01.plala.or.jp

死別を経験した人々は、自分の溢れ出る感情に圧倒され、疲弊させられることもあります。ケイトは「様々な感情が入り混じり」ました。しかしまた、「たくさんの恵みがありました。美しさと平和に満ちていました。心の準備ができる時間があったことに私は感謝しています。それから夫が死を迎える前に領聖できたことにも感謝しているのです。私は祈りに支えられていました」このような祈りによって、彼女は自分も夫も神の愛につつまれているという安心感、希望を持つことができたのです。

ダリアはこのように言います。「最愛の友がいなくなるとにかく寂しかったのです。思う存分泣きました。彼が今もここにいてくれたら、と願いました」エレナが体験したのは、「神に対する怒

りではありませんでした。中毒症状と闘った息子がこんなにも衰弱してしまった、というやり場のない漠然とした怒りです」ギャビはこのように言いました。「とても疲れていました。何もかも忘れようとしたし、小さなミスを繰り返しました。ただただ途方に暮れていま

## 悲しみのはじまり (2)

た」悲しみがあまりに大きくて、自分が「霧の中

にいる」ように感じてしまうこともあります。ギャビもそのような感覚をもった一人です。クリスはまるで自分が「無重力のように感じ」、友達や家族からも「切り離されてしまったかのように感じ」ました。クインが言うには、「悲しみは私の悲しみであって、亡くなった友の悲しみではありませんでした。彼女は大丈夫でしたが、私は大丈夫ではありませんでした」クインは自分の信仰によって安心

することができました。自分と自分の家族は悲しみと喪失感の中にいたとしても、亡くなった友は平安の安息のところにいる、そのように思えたのです。

## 友達や家族の反応～実話をもとに

友達や家族は慰めの言葉をかけてくれます。そこには有益な言葉もあれば、そうではない言葉もあります。ヘイゼルは言いました。「前に進みなさい、と人からよく言われることでしょう。でもその言葉に耳を傾けてはいけません。今ある全てを噛みしめるのです。それは賜物なのですから」別の友達は、必要なだけ時間をかけるべきだということをヘイゼルに気づかせてくれました。レナードは言います。「正直つらかったです。というのも父の埋葬式と通夜の間、皆が私のことを元気そうだと言うからです。私が皆のことを慰めているように見えたそうです。私が顔に微笑みを浮かべているのを見て人々は驚いていました。しかし私が思うに、それはショックを受けていたからなのです」

プリシラの母が亡くなった時、母の年齢は90代後半でした。プリシラは言います。「皆が母のことを長生きできたねと言いました。けれども母の年齢がいくつで、どれだけ生きたかということは全く問題ではありませんでした。今も私の母なのですから！」プリシラはそのような人々の言葉には慰めを得られませんでした。なぜなら彼女の悲しみはそれにも関わらず深いものであったからです。自分自身のためにはならないことを言われている、ということに気づくこともあります。けれどもそのような人々は、

自分自身を慰めつつも、死別した悲しみに沈んでいる人々を助きたい、という気持ちはあるのです。

ボニーは友達に言われました。「生命と死、これは神秘だよ。この橋を渡るためには助けが必要だ。それは、必要なだけ時間をかけて悲しむことだ」クリスも悲しみ始めた時に、友達の一人に言われました。「両親を亡くしたという悲しみを克服しようとしてはいけない。時間をかけよう。時間をかけよう」私もこの本を読んでいるあなたと共に「時間をかけよう」と言いたいのです。

愛する人のことについて人が話しをしていることを聞くことは、力になります。ケイトは言いました。「夫が多くの人に影響を及ぼしたことを聞いて、感動しました。そんなことに気づいたことがありますでした」この気づきが慰めをもたらしました。レナードは、家族を失ったことのある人と話すことによって目が開かれたと感じました。「これは傷のようなものであって、何度か傷口が再び開く時がある、と誰かが言いました。この言葉はとても私のためになりました。確かにそうなのです。私はより多くの時間を傷口を処置することに充てることができましたので、今までに感じたことはない感情を抱くことができました」友人や家族が教えてくれた知恵を十分に理解するには、時間がかかることもあります。

## 共同体の力～実話をもとに

多くの人にとって、喪失感や悲しみが始まった数日乗り越えるために、共同体の一員であることが不可欠なことで

した。クリスは共に祈ることには力がある、と言いました。「通夜、埋葬式、40日祭に参拝することは大切です。そこで文字通り、自分が(※共同体という)からだの一部になるからです。(※愛する人という)からだの一部を失ってしまいました。そのような時、私たちはどうしたら一緒に悲しむことができるのか、と分からなくなることもあります。愛することを恐れてしまうからです。でもただ一緒にいるだけで十分なのです」フランシーヌは「家族、教会のメンバー、儀式、習慣、もの、人々がとても意味のあるものである」と感じられました。「そこに癒しがありました」



ギャビは内向的で一人でいることを好む方だと自分で言います。彼女は言いました。「私は沈黙の中で、独りで悲しんでいる方が落ち着きました」しかし彼女の家族たちは、自分達の悲しみを外に現わす傾向がありました。「叔母たちは良く話すし、思い出を分かち合い、常に話して泣いて笑っていました。でも彼女たちにはそれが必要だったのです」

アイリーンの父は突然死を迎えました。父は聖公会に属していました。アイリーンはこのように言います。「私の父は正教会の埋葬式を挙げた訳ではありませんが、父の教会の人々はコーヒーやメタクサのブランデーを用意して私たちをギリシャ風にもてなしてくれました。ご婦人たちがインターネットでギリシャ料理のレシピを調べてつくってくれたのです。とても感動しました」彼女も彼女の家族も支えられていると感じました。

クインは共同体の中で癒しを感じました。彼女は言います。「私たちの中には悲しみがありましたが、それは同時に喜びをもたらすものでした。友は亡くなったが、私たちと共にいて、変わらず私たちと一緒に存在していた、そこに私は幸せを感じました。彼女が助けの手を差し伸べた人々が皆集まっています。ですから、皆が彼女を愛し続けているのです」サーシャはこのように言いました。「教会の女の子たち、大切な友達、彼らは私にとって全てなのです。友達は金曜の夕方になると私のアパートに現われました。そして私が泣いている間、一緒に座ってくれました。毎週こうしてくれたのです。最後には決まって『少し歩こうか』となって、私たちは一緒に歩きました。彼らが私を救ってくれました。彼らは素晴らしい存在です」

セオの母は正教徒ではありませんでした。彼女は葬儀をしてもらうことを望みませんでした。「彼女は火葬してくれるように望んでいました。人々に集まって欲しいという望みもありませんでした。私たちは彼女の望みを尊重しようとしたのですが、私たちには彼女の人生の歩みを残し、この出来事を残す必要がありました。彼女の属していた共同体にとっては、なおさらその必要性がありました。私たちはそうすることに決め、追悼の記念を行いました。これは私たちのためです」確かに彼女の信仰においては、葬儀に優先順位を置くという考えはありませんでした。しかし彼女の周りの人々にとっては、共同体において集まり、共に悲しむ機会を見つけることが必要だったのです。

## 全 国 公 会



7月13日(土)、14日(日)の2日間にわたって東京ニコライ堂にて全国公会が開催されました。札幌管轄からは私後藤とパルメン傳法執事長(札幌教会)が出席しました。

開会祈祷をした後、セラフィム府主教座下より以下のような趣旨のお言葉をいただきました。「教会の基本は宣教である。宣教というと教義を伝えて人を納得させるというイメージがあるかもしれない。しかし、宣教の本質はフィリップがナファナイルに言った言葉、『来て見てごらん』ということにある。我々は一体人に何を見せるのだろうか。聖堂だろうか、イコンだろうか。しかしそこに留まれば博物館の解説と同じである。そうではなく、正教に生きる我々の姿を見せることこそが宣教である」また、府主教座下は九州北での宣教の取り組みについて改めて言及され、また毎年教区から一人ずつ神学生を出して欲しいという要望を話されました。

次に小池神父様より宗務総局の報告、また3つの教団設置委員会から昨年度の活動の報告がありました。宣教企画委員会からは、各地の教会を紹介する冊子、山下りんのイコンを紹介する冊子を印刷することが報告され、また洗礼の意義

や正教の本質を伝える冊子についても作成を検討中であることが報告されました。財務諮問委員会からは教区負担金の算出方式の見直しを検討していることが報告されました。

また九州北ハリストス正教会が発足した経緯についてグリゴリイ水野神父様が報告され、セルギイ市来執事長は「これから新聖堂を建設したいので、皆様の御協力をいただきたい」と話されました。

翌14日の聖体礼儀はセラフィム府主教座下によって司祷され、その中でイオアン庄司輔祭(横浜)が司祭叙聖され、ステファン内田神父(釧路)、ステファン桑原神父(前橋)、ディミトリ田中神父(小田原)が長司祭に昇叙されました。



また、ゴルディ松井神学生とイウスチン菊地神学生が副輔祭に祝福されました。

聖体礼儀後の二日目の会議では、教団の財政について、また新しく建設を予定しているニコライ会館(ニコライ堂の信徒会館兼聖職者住居)について報告を受けました。最後にセラフィム府主教座下より「教会は一人だけでやっていけるものではなく、皆で舟に乗り込むようなものである。そしてこの世の荒波に向かっていく」というお言葉をいただきました。最後に人事異動について、イオアン小野神父様(静岡)が横浜教会、また新しく司祭になられたイオアン庄司神父様が静岡教会、ソロモン川島神父様が豊橋教会に赴任することが発表されました。

## 婦人会だより



7月10日、カリンズの実が色づきジャム作りをしました。暑い中お手伝いしてくださった方ありがとうございます。信徒総会で販売します。

婦人会では、9月にはぎの会、10月に見学会、今年はウポポイを見に行こうと考えています。10月の末には総会を予定しています。よろしくお願ひ致します。

(パラスケワ中野良恵)

### キリール加藤正志兄 永眠

6月29日(土)、札幌教会の信徒であるキリール加藤正志兄が永眠されました。98歳でした。キリール兄は今年に入ってから脳梗塞を患われ、施設でリハビリする生活を送られていたということです。7月1日(月)に札幌教会聖堂にて通夜パニヒダ、翌2日(火)に埋葬式が行われました。

### マトロナ佐藤はるの姉 永眠

7月5日(金)、岩見沢在住のマトロナ佐藤はるの姉が永眠されました。97歳で大腸がんを患っていたということです。岩見沢公益社の『家族葬ホールめもりある』にて7月8日(月)に通夜パニヒダ、9日(火)に埋葬式が行われました。

私事ですが、全国公会後に新型コロナウイルス、溶連菌に感染し、7月21日の小樽の聖体礼儀、信徒総会を中止させていただきました。そのため、小樽教会の信徒総会を下記のように再公示します。ご迷惑をおかけしました。

## 公 示

教役者・信徒各位

＋主の御名によりて

小樽教会の2024年度信徒総会を下記の通り開催いたします。

記

期 日	2024年8月18日(日)	※聖体礼儀終了後	開会
議 題	1、宗務に関する件	2、財務に関する件	
	3、執事・監査に関する件	4、その他	
	(宗) 小樽ハリストス正教会		

代表役員 司祭 エフREM 後藤 悠太

2024年8月1日